

虹

に

周りの支えで夢貫く

194「市民ランナーの星」の挑戦

新緑に雨が降り注ぐ。魚津市の丘陵地にある桃山運動公園で、そろいのTシャツを着た小中学生が木々に囲まれたコースを駆ける。陸上クラブ「MT・SUPOLA(スポラ)」の選手たちだ。息を切らしながら、1500mを走り終えた。

「いいタイム。速い、速い」。クラブの監督、間野敏男さん(52)＝魚津市＝が、雨にぬれた選手たちを励ます。「今日はまだまし。もっとひどい天気の大会有るぞ」。よほどの悪天候でない限り、大会は開催される。雨を嫌がっていれば、レース以前に気持ちで負けてしまう。子どもたちには、走る楽しさとともに「あきらめなければ、必ずチャンスはやってくる」と伝えている。

間野さんはマラソン選手だった。実業団に所属せず、たった1人で練習に取り組んだ。今から20年余り前、国際大会で入賞を重ね、「市民ランナーの星」と呼ばれた。

◇

陸上を始めたのは、中学校に入ってからだった。生まれは新潟県小千谷市。山あいにある学校は全校生徒が80人と少なく、部活動は陸上か卓球しかなかった。長距離を選んだのも、短距離より得意だったというのが理由だった。

県大会で入賞し、強豪高校に進んだ。だが、指導に理不尽さを感じ、2年の冬に退部した。部活をせずに遊ぶのは楽しかったが、3カ月もすると、陸上部での思い出が頭に浮かんできた。記録が伸びてうれしかったこと、仲間たちと励まし合ったこと――。

部に戻りたいと、顧問に告げた。怒られると思ったが、「やっと分かったんか」とすんなり認めてくれた。仲間たちも間野さんの復帰を喜び、受け入れてくれた。

間野さんは燃えた。毎朝5時に起きて家の近くで走り込みをし、部活の練習にも打ち込んだ。駅伝の県大会では、最も距離が長い「花の1区」を任せられた。2位でたすきをつないだものの、ライバル校の選手に30秒差をつけられた。チームはその後に挽回したが、1秒差で負けた。責任を感じた。

「このままじゃ終われない」と思っていた時、富山県内の実業団から声が掛かり、黒部に移り住む。ただ、国内最高峰のニューイヤ―駅伝で成績は残せず、熱い気持ちを忘れそうになっていた。

合宿の練習の一環として、さいたまマラソンに参加したことが運命を変える。22歳

で初のフルマラソン。駅伝よりもペースが遅く、走りながら楽しさを感じた。初めての感覚だった。

30㊦地点を過ぎてからは足が重い。意識が遠くなりかけながらゴールした。ローカルの大会ながら、2位。「楽しさ、達成感、充実感の全てがゴールの瞬間に集約されていた」。他の長距離種目とは全く別物だと感じた。「これを極めたい」と思った。

しかし、会社が力を入れるのは駅伝。マラソンと駅伝は開催時期が近く、疲労や調整の時間を考慮すると、両立は不可能とされた時代だった。転向は認められなかった。

だから、間野さんは会社を辞めた。

◇

当然、家族は反対した。「子どもが産まれたばかりなのに、どうしようかと思いましたよ」と妻の良子さん(51)は振り返る。



「白き菫葉」 広田郁世

不安しかなかったが、夫の決意は固い。一緒に歩いていくと決めた。

間野さんは「100%とは言えないけど、『頑張ればできる』って変な自信があった」と振り返る。しかし、現実は一筋縄ではなかった。支援してくれる企業を探したが、実績のない選手を受け入れてはくれない。

生計を立てるため、魚津にある中華料理店「八番麺屋」(現8番らーめん)でアルバイトを始めた。客が少ない時間帯にシフトを外してもらい、20～30㊦走ってから店に戻って再び働く生活。体は疲れ切っていた。記録は伸びず、2大会連続で途中棄権した。

「大企業を辞めて、ばかじゃないか」。周りからの心ない言葉は、間野さんだけではなく、良子さんにも向けられていた。間野さんは、もう潮時だと思い始めていた。

そんな時、店を経営する森國光さん(80)

＝魚津市＝から声を掛けられた。森さんは詳しい事情を知らない。近況を伝えると、意外な言葉が返ってきた。「次の大会まで仕事に入らんでも給料を出すから、練習しろ。ただし、自己ベストを出せ」

間野さんは生活の全てを練習に捧げた。走る、食べる、寝る。それだけの毎日。良子さんは練習の記録を付け、栄養を考えた食事を作り、練習場所の河川敷まで車で送迎した。幼い子も練習に付き添い、給水のボトルを手渡した。魚津にある接骨院の院長に毎日、体の状態を見てもらい、限界まで練習できるように次のメニューを組んだ。

走るのは1人でも、周りには夢を支えてくれる人たちがいた。

2カ月後。新人ランナーの登竜門とされる防府読売マラソンで10位に入り、自己ベストで新人賞を獲得。その後も練習を重ね、

国際大会で徐々に順位を上げていった。

◇

2002年2月10日、東京国際マラソン当日の気温は2度。雪がちらつく。出場者の体力の消耗は激しく、途中棄権する選手もいた。間野さんも38㊦地点で立ち止まろうかと思った。先頭集団から脱落した選手は何人か抜いたが、自分の順位は分からない。

「トップ！ 日本人トップ！」

街頭の声援が耳に入る。「それじゃ、やめられん」と思った。苦しい時に頭に浮かぶのは、いつも応援してくれる人たちの顔。「絶対、ゴールしないと」。雪国での練習が奏功したのか、ふらふらになりながらも走り抜いた。タイムは2時間14分12秒。

国際大会で日本人トップの栄誉の瞬間を、間野さん自身はあまり覚えていない。ゴール直後のインタビューを受けられない



中学生たちを指導する間野さん(左)
＝桃山運動公園

ほど疲弊していた。足の裏の皮が大きいくれ、白いシューズは赤く染まっていた。

03年、アテネ五輪の日本代表選考会となる福岡国際マラソン。練習では過去最高の仕上がりで、2時間10分を切る感覚があった。だが、調子が良すぎた。3日前に練習をしすぎて本番に疲労を残し、19位に沈む。

時代は変わりつつあった。日本選手の高速化が進み、2時間7～8分台の記録が続出。04年の東京国際マラソンで間野さんは自己ベストタイの2時間11分52秒を出したが、12位。限界を感じ、世界を狙うのは難しいと考えた。翌年、32歳で引退した。

良子さんの記憶に残っているのは、大会での雄姿よりも、厳しい練習に明け暮れる間野さんの姿。「夫が自分で満足のいくまでやり遂げたことがうれしかった」

◇

現役を退いた後は、八番麺屋で社員として働いた。すると今度は、魚津市体育協会(現スポーツ協会)から声が掛かる。職員として運動施設の管理に加え、長距離選手の育成もしてほしいという。

店の仕事にやりがいを感じており、断ろうと思ったが、陸上への思いに再び火が付いた。次は指導者として、世界に挑戦したいと思った。森さんも後押ししてくれた。

間野さんは、しんきろうマラソンの運営業務などをしながら、クラブチームを設立。幼いころから練習する父の姿を見ていた長女の七彩さん(28)や長男の健太郎さん(24)も所属し、長距離選手として活躍した。クラブは21年に地元スポーツ少年団と合併し、短距離やフィールド競技も対象とした。現在は新川地域の小中学生70人が所属する大所帯となった。

「支えてくれる人との出会いがなかったら、私の人生は成立していない。今度は自分が環境を整えてあげたい」と間野さん。県外の高校や大学などに行った選手が、地元に戻って競技を続ける支援もしたいと考えている。「誰かにオリンピックに連れて行ってもらいたいな」。100%の確信はないが、そんな選手に出会える気がしている。

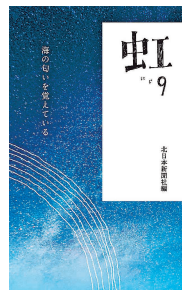
間野さんの家族や森さんに取材すると、みんな楽しそうに現役当時の話をしてくれたのが印象的でした。共に夢を追った、かけがえのない時間だったことが分かります。七彩さんは子育てに忙しくなるまで、間野さんのクラブでジュニア世代を育成。健太郎さんは小学校教員となり、あきらめないことの大切さを児童に伝えています。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は7月1日(火)です。